

## 影：創作

著者	北野，裕一郎
雑誌名	龍南
巻	2 2 4
ページ	4 9 - 6 6
発行年	1933-03-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7115">http://hdl.handle.net/2298/7115</a>

創作

影

文一甲三 北野裕一郎

晩夏が初秋を抱いてゐた。暦の上ではまだ夏の中に我々は眼の前の日を入れるであらうが、この高原では夏と秋とを天秤にかけて見たら、きつと秋の方が下るだらうと思へる。

一面のすゝきがそよぐと、秋の香が一面に漂ひそのすゝきに交つて女郎花桔梗が咲き亂れてゐる。すゝきが波をつくると、山の黒いかげが大きくゆれた。高原は今日光を浴してゐた。月光はあふれてゐる。無盡藏だ。

小高い丘の上に京大の温泉研究所があつた。その赤い屋根が、めつきり秋らしい紺青を増した空にくつきりしたりんくわくを畫いてゐた研究所はひっそりしてゐる。獄舎の様な静けさと、教會堂の持つ様な落ち着きをその建物は示してゐた。建物の横の細長く煉瓦で區切られた花壇にはけしの花が眞赤に亂れてゐた。建物の後は高原に特有な落葉樹が十本ばかり、する／＼と伸びてゐた。屈託もなさうに。

まだ余り此の高原には家は建てられてゐない。この研究所の建物と、彼が今生活してゐる彼の伯父の別荘とを除いて

は二十位の建物が散らばつてゐた。それ等の中には、別荘、小さい百貨店兼青物屋、それに馬のための牧舎と、その主人の住居などが含まれてゐた。それ等は、上から見たら飛行場の格納庫の様に見えた。

彼の伯父の別荘は研究所とは反対の方向にある。小高い丘の上に在つた。位置としては此の高原では最上と云つて良かつた。白い家だつた。一寸病院を思はせる様な所もあるが、實に朗かな、瀟洒な建物であつた。それは彼の伯父が、金山が當つた時に、建てた家だつた。この家が建てられる時には、此處には研究所と牧場しかなかつたのだ。

建物は廣い敷地を有つてゐた。それには廣い花畠があつた。テニスコートが二つ並んでゐた。その横にぶらんこが淋しくさがつてゐた。取り残された様だつた。みかげ石の垣には全部薔薇が巻かれてあつた。門から玄關までの一町に近い間は玉砂利がしかれてあつたが、それは運ぶのに最も困つたものだつた。

建物の白さは、研究所の赤い屋根と面白い對照を作つてゐた。又その白さは高原に夕暮が迫つて來た時、最も良くその獨立性を表すことが出來た。建物は二階作りの洋風で、階上がバルコニーになつてゐた。それには此の頃は洗濯物がほされてゐた。主人がゐるときそんなことは出來なかつたのだが、今主人の不在中は、留守の婆さんが、一番日當りの良い所として此處を選んだのだつた。

今此所で日を送つてゐる人は、彼と留守居の老夫婦の三人だつた。訪れる人もなく、靜かな日が明け、そして暮れて行つた。此處に來ると一抹の哀愁を伴つて、思ひ出が胸の中のかくれ場所から顔をそつと出すのだつた。そしてその思ひ出は、何時まで経つても現實にむすびつく様には思へなかつた。彼は過去の生活をさかさまに、辿つて行くことに、大きな無常と快さを見付けてゐた。それを手放したくなかつた。それに過去の思ひ出を靜かにまとめて見て笑ふのにも泣くのにも都會の良い秋が訪れてゐた。周圍の寂莫は彼の心にも侵入してゐた。その心の中では、彼の経験と、その経験より出た想像がいくつもの蜃氣樓を作つてゐた。その蜃氣樓は、一つが現れると、次のがその上にダブつて來てしばら

くすると第一のは消えて終ひ第三のが又ダブつて来るのだつた。又それ等は、時の支配から超脱して、背景と人物が大きな矛盾を持つた幾多の場面を生じた。表現派の人々にもそれは受入れられないだらう。それ等のめまぐるしい轉回の後には、あきらめに似た感情が彼の心を獨占して終つた。窓ぎはの木の評らない背の高い木の白い幹に陽がさんさんと注いで、きらり／＼輝く程だつた。すべては動かされない。極樂の畫の和平が、此處にもみなぎつてゐた。そこには何物も現在の位置にあまんずる満足が見られた。佛教で云ふ「あきらめ」が在つた。すべては寂莫裡にあつた。

彼は階上の南向きの日當りの良い部屋を占領してゐた。その部屋の窓からは、はねてゐる放し飼の馬が見られた。窓ガラスは大きなヒヤシンスが模様されて、且色どられてゐた。

廣やかな部屋のそこここには四方から集められた彫像浮彫繪畫の原物や複製が飾られてゐた、棚には美術史の著書やポルトフォリオがならべられてゐた。大きなピアノが輝いてゐた。部屋は主人の豪奢を示しうなづかせるに足るものであつた。

その窓ぎはに彼は、ソファに横になつてゐた。半ば眠りに落ち、半ば意識してゐる様な様子で、只窓を見てゐた。空は澄んでゐる、紺青、その中に、白く淡い雲が、三すじ四すじ水平線に漂つてゐた。眼にしむ程の青さ、然しそれは斷ち難い、人をひきつける物を持つてゐる、秋と空、秋は空から来る、空程秋に敏感な物はない。彼はその状態にありながら今日平山から來た手紙を思ひ浮べた。それは彼の今までの心の静けさを破つて終つた。湖水に投げ込まれた石、それが此の手紙の彼にもたらした結果だつた。それは罫の無い殆ど正方形に近い純白のレターペーパー二枚からなつてゐた。その二枚が大きな洋封筒に包まれてゐた。それは平山の手からポストされてから五日目である事を消印が知らせてゐた。又それは麓の町の郵便局から二日に一回廻つて来る配達夫に由つて届けられたものだつた。彼はそれをどんなに胸を躍らせて讀んだであらう。彼はもう一度その手紙を出して來た。男らしさの充ちた字が走つてゐた。それは彼の心

の中に六月の日の太陽とその後の想像を形作つた。

おい。その後如何してゐる。体はもう大分良くなつたさうだが、用心が必要だぞ、そちらは涼しいだらうが、此處は實に暑い。残夏と云ふ奴だ。第一練習がたまらぬよ。

今日此處へついた。市のコートは相當なものだ。四つ程ならんでゐる。光線の向も良く考へられて居る。試合は明後日から三日間續く積りだ。案外容易に勝てるかも知れない。N大の相川は出場せぬと云ふ噂だ。何でも盲腸をやつたさうだ。奴さん残念がつてゐるだらう。常の彼ではね。同情してやりたくなる。相棒の山田も悲歡してゐるだらう。二人のコンビは定評があるからね。

それからね。かう云ふことを知らせるよ。多分知つてゐると思ふが、ほら君が六月の試合の歸りに教へて呉れたね、名丈け。

村本敏子とか云つた人さ。それがね君、今日俺と一緒にの汽車であの家は引越されたらしいよ。停車場で若い女の人々が取巻いて何か云つて居た。時々「村本さん」とか「敏子さん」とか聞えて來るので、君の言つてゐた人は彼の人かと思つた。きれいな人だつた。俺の周圍の人は有名な辯護士であつた。父が亡くなつたために、母娘の二人が田舎へ引越すのだと云つて居た。何所まで行くのか知らない。君からあんなことを聞かされてゐたので何だか變な氣が、少し失望も伴つたらしい。そんなことはもう如何でも良い。

明後日からは試合だ。頑張るぞ。体に注意しないと不可いぞ。では又。

六月の空は燃えてゐた。

純白のボールはきらきら輝く、全能の神の魂であつた。

白く走るライン。畸形的に地上に躍る足。

### 西日本選手権大會

ヴォレー。白い球はきゆつと短かく尾を引く。チョップで返されたボール。平山の眼は足は、身体も魂も一つのボールの忠實な従者であつた。戦ふこと勝つこと、それは彼の今の意識の外に位してゐた。只ボールを正確に追ふことが大きな専制力を有つた君主だつた。敵のネットを越す様には思へなかつたホワード・ストロークをサーヴィス・ラインの邊りで強くヴォレーでボールをアンダー・カットした。正確な當り。敵の弱つて宙に浮いて來た球をレフトに深くスマツシユした。見事決つた。ボールは氣まゝにはねる。四つの足がそれを追ふ。二つの影がコートの上で伸びたり縮んだりする。ボールはラケットからラケットへ移る。ボールも輝く。觀衆の眼もかゞやく。

白熱。そこには息づまりがあつた。窒息。熔鑛爐。中で熔かされて白熱した鐵鑛。窒息。觀衆。ライン。六月の太陽ボール。二つの影。アフリカの熱砂。すべてが一つに燃えようとしてゐる。三日間續けられた試合。今日は優勝戦。「デユース」。「アドヴァンティジ・サーバー」。「ジユース」。レフエリーの聲。それは此所ではボールにつぐ、權力を持った支配者だつた。「アドヴァンティジ・ストライカー」此迄幾度くり返されたか知れない。セットは 5-3。平山の有利。ゲーム・カウント 4-4。伯仲。「ジユース」が幾度となく繰返された。平山の生命は不死鳥のそれに近かつた。此のセットを、後二つのゲームを取れば良いのだ。

西園は恐ろしい氣がした。眼をつぶつて見た。大きな人を壓し盡す様な空氣が彼を取り卷くのを感じた。沈黙。不氣味な沈黙。只ボールがラケットに當る音と時々交る審判の聲と、見る人の荒い呼吸が聞えた。彼の血液は大きな音を立

てゐた。心臓が鳴つた。蒸汽機關車。大きな音。早くまわる車輪。目まぐるしい光景。時間が忘れられた。何分位経つただらう。

彼は、今まで沸騰してゐた湯に水を加へられた様な雰圍氣の變化を感じた。眼を開いた。オール・ジ・エンド、平山がベンチに歸る、汗にまみれた姿が後向きに見られた、西園はボールドを見た。6セット―3セット。平山は勝つた。すべての人は未だ、スタンドを立たなかつた。まだ眼の前に試合をくり返しながら酔つてゐた。平山がトロフィを受けに進む時拍手が起つた。その中には、音樂會に於て、甘い、人を此の世から導き出すメロディの後に我々がしばし経験する感情の開放があつた。緊張された感情神經の開放は二度も三度も起つた拍手に置き換へられた。西園は二時すぎの太陽が急に暑さを増すのを背中一様に感じた。人々は流れ出はじめた。コートは冷たくなつて來た。

控室迄は遠くはなかつた。半町余りに思へた。西園は平山を迎へる爲にその戸口迄來た。控室は人が立ち込んでゐた肩越しに人々に取り圍まれてゐる平山が見られた。もう背廣に更へてゐた。取り圍まれてゐる平山を見た時、西園は誇りと友達に對する尊敬とを感じないではゐられなかつた。然しそれは幾分の孤獨の淋しさと云ふものが附隨してはゐたが。入つて行くのをためらつて、戸口で待つことを決心して終はうとした時、平山の聲が頭上に聞えた。

―やあ、待つてくれたのか。

―うん。今から如何する？

―直ぐ歸るから一寸待つてゝ呉れ。

部屋の中で、がや／＼澤山の聲が交るのが聞えると、平山が出て來た。

―じや、失禮します。言葉を残して二人は足を動かし初めた。西園は背後に人々の視線を感じながら。よくやつたね。

—ありがたう。

簡単な二人の言葉から、熱い友情を汲み取ることは誰にも容易だつた。まだ場内に残つてゐた人は尊敬の心を抱いて彼等を見た。さゝやき合ふ人々もあつた。勝つた人には當然それは受く可きものであつたかも知れない。二人は門の所まで來た。

—車にしようか、それとも歩く？

西園は立止つて友の顔をのぞき込んで訊ねた。

—歩かないか。—西園も一寸の間足を止めて云つた。

—疲れてはゐないかい。

—いや、さうでもない。歩いて歸らう。

—さうか。それなら、さうしよう。

二人は並んで再び歩き初めた。

—おいどちらか一つ出せ。持つてやらう。

—こちらを頼むよ。ユニホームの包みを差し出した。西園はとれを受取りながら言つた。

—いやに蔽ひかぶせるやうな暑さだな。

—夕立が来るかも知れないぜ。

燃けついてゐるアスファルトの上に、二人の影が四時すぎの太陽の爲に濃く投げ出された。

舗道の上を、種々な人々が色々な服装と色々な感情を着けて、一つの流動体の様に動いてゐた。光線にさらけ出された道路は埃が立つて、それが輝いてきら／＼舞つてゐた。日曜日であることは町を雑踏させた。然しその中には常には



「他の曜日には――見られぬ、ゆとりが感ぜられはしたが。

今迄陰險さをたゞへて、空の一隅に位してゐた雲の群が、四時半のサイレンを合圖に、ホイッスルと一時に動き出したラクビーのメンバーの様に四方に動き始めた。又それは堰を切られた水の様だつた。雲は瞬間に汎濫し初めた。街路に横たはつてゐた、又動いてゐた影は一度に消された。

「おい、雨だぜ。」「ボタリ、首すじに感じた平山は今迄黙つて歩いてゐた相手に言つた。

「さうだ。おい。止むまで何處かで待たう。リオンが直き其處だ。急いで行かう。

あわたゞしい足音が街路に起り、それが暗くなつた建物に反響した。雨がまだらにアスファルトを色どつた。雨がザアーツと音を伴ふ頃には街路の人々は何處か適當な所に避けてゐた。只自動車があわたゞしい警笛を續けさまに後に残して走つて行つた。自轉車のベルは雨に消された。

全てが混亂した。狂はされた。映畫の忙しいモンタージュを、倍も速度を加へて映した様な遽しさ、狂ほしさが在つた。人々は焦燥と、逃げおぼせた安堵との矛盾した感情で、眞暗い空を見やつた。雨がアスファルトの上を銀色に跳ねてゐた。踊つてゐた。さうして流れてゐる水の上に落ちた雨が無數の輪を忙しく、小さく畫いた。不平が一度に洗ひ流されるまで雨は止みさうには見えなかつた。

二人の背廣の男、平山と西園は、家々の軒場を縫ふやうに走りつゞけて、餘りぬれずにリオンの裝飾されたドアの前に着いた。夕立に暗くされた内部では、煽風機が遠慮深く音を立てゐた。それと共に白い輕やかなカーテンがふるへてゐた。二人は窓際のテーブルに腰を下した。一寸路次に入つたこのテイ・ルームはお客はいつも少かつた。で彼等が入つて來た時も、買物に出たらしい二人――母とその娘の様に思へる――だけだつた。

「何にする？」

西園は雨から逃れてほつとして言つた。

―さあ。ソーダ水とケーキでも食べよう。少し腹が空いた様だから。

―僕もさうしよう。ソーダ水とショート、ケーキを二つづつ下さい。

―二つづつでございますね、

小さい体に大きすぎる黒い眼をくるつと動かして、念を入れて、女は奥へ入つて行つた。

―やつと助かつたね。

―うん。此が他の所だつたらビショぬれさ。ラケットがしめつちや大變だからな。

西園は平山がさう云つて、置いたラケットの方を見た。一本のラケットがズックの中でラケットの形を示してゐた。その時、「未完成」だと思へたのだが、柔かいメロディが奥の方から流れて來た。柔かい調は煽風機のまわるのにつれて、強弱に變化して聞えて來るやうに思へた。ある夢の國へ引きづつて行くのだつた。しめられたガラス窓に水が走つて居た。雨は止まないらしい。

―お待ち遠う様、

二人は無言で、ストロウを手にした。柔かい調は華やかな落着きを見せてゐた。

西園は、煽風機がこちらに向いた時、香水のかすかな香りが漂つて來るのを感じた。―それは多分向ふの女の人の方から來るものらしい。その匂は、野茨の花を思ひ起さした。なつかしい香り、柔かい調べ。

走ると、路傍の野茨の白い小さな花がはらと散つた。夏の夕暮れ。空がばら空に色どられてゐた。二人は走つて歸つた。

―私は走れないわ。もうきつくて……。

「駄目じゃないか。そんなこと言つて……。僕丈け歸るよ。左様なら。こんなに遅く迄遊んじやつて叱られるもの。又、

意地悪く言ひ捨てゝ歸らうとすると、彼女は泣きながら、追つて來た。待つてやりたかつたが、良くからかつて逃げた。

「待つてよ。待つてよ。

女は「幼い女」泣き出しさうに走つて來た。頭の白い大きなリボンが、夕暮に揺れた。

彼等二人は良く、丘の向ふ迄遊びに出かけた。そしてとつぷり日が暮れてから歸り着いては良く叱られた。

「あらつ。

女は石につまづいてか轉んだ。彼はびつくりしてふり返つた。女は臥したまゝ、地面から起きなかつた。彼は肩をつかまへて起した。

「緒が切れたの。

小さい下駄の赤い鼻緒が切れてゐた。

「いたかない。

「いや。

女は聲を出す代りに幾度も首を横にふつた。彼が着物の埃をはらつてやる時、亂れた前に白い脛がぼつかり浮んでゐた。彼は何故かはつとした。

「僕がおぶつて上るよ。ね。

彼は腰をかぐめたが女はふり向きもせず前へ進んだ。切れた下駄を片手にもつてビツコの様にして、彼は後から着

いて行つた。後悔が胸に起つて來てゐた。女は石をふんだのか、痛さうに立ち止つた。彼は走りよつた。

— かんになんしておくれよ、ね。そして僕におんぶして歸らうよ。

女は黙つてゐたが、急に彼の胸に頭をおし付けてしく／＼泣き始めた。それでも彼に、すなほにおぶさつた。歩み始めたが、未だ泣き止まなかつた。二人は丘を下つた。夕闇がすっかり四邊を包んでゐた。その中で道の兩わきの野茨の花がほのかに浮んでその香がひしひしと迫る夜の中を流れてゐた。家の灯が見え始めた。彼はこのまゝで歸るのが何だかはづかしく思へた。で丘の麓に來た時、そつと背中中の女を下した。女はいぶかしそうな顔をした。

— 僕のおはき。

彼女は、彼の顔を見てゐたが黙つて彼の靴をはいた。それは當然大きすぎた。でも二人は歩き始めた。時々女が轉びさうになるので、手をしつかり握つて、女の下駄を片手に持つてやつた。彼ははだして、時々石の上をふんで痛かつた。でもこらへた。それは大きな犠牲的行爲をする志士のような満足を感じた。

— 家が近くなつたから、獨でお歸り。靴はいつか取り行くから、

別れ途で彼が云つたが、女は聞かなかつた。二人は終に女の家の前まで來た。

— さあお家よ、

— うん。

黙つて彼女はうなづいた。再び彼が彼女の着物の埃をはらつてやるために輕くた／＼と白い花瓣が一枚舞ふ様にして地に落ちた。野茨の花。その匂があたりに動く氣がした。彼は直ぐ引返して、家の方へ向つた。はだして、彼の父が地方の都市Sの高等商業の教授だつた時。村本とし子。小學校五年の彼。その後はどうなつたか、別れて彼の家がO市に移つてからは不明だつた。女とは言へない幼かつたとし子。その名が時々、彼の唇に遠い物語の女主人公

の様になつて浮んで来るのだつた。彼が心の中で一つの遠い思ひ出を、完結した、丁度その時雨の止むのを待つたために、二三人の學生ががや／＼云ひながら入つて來た。彼が思ひ出から歸つて來た時、新らしくレコードが廻り始めた。雨は依然硝子の上を這つてゐた。贅澤な遊びに只獨りひたつてゐた様な氣が（黙つてゐる平山を見た時）して濟まなく思つた。彼一人の持つ幻の様な天國の樂しさ。

戰の苦しさ、それ丈が持つことの出来る一種の魅力。勝つことの愉悅。白く光るライン、眩しい光線。大きな力を持ったボール。裁判官の嚴肅さと決定力を持った審判の幅廣い聲。そしてほつとした満足。それ等と共に、平山の顔一陽に焼けた男性的な一から一沫の物足り無さと、淋しさを見て取つた西園は、はつとした。黙つて残りのソーダ水を一氣にストローから吸ひ上げると西園は云つた。

—雨が止んだ様だ、出ようか、

—出よう、

とつくに飲み終つてゐた平山は簡単にさう云つた。

—有難うございました。

小さい女の聲が、彼等の背後に聞えた。

雨はからりと上がつてゐる。嘘の様な空。日の光が一杯充ちて、水のある舗道に輝いて眼を射た。思ひきり不平を爆發させた。後の疲れから來た靜穩そんな物が感じられた。アスファルトの上は前の様に、色々の足、車で色どられてゐる。

二人は並んで歩いてゐた。周圍に無關心な態度を持ちつけて。幼い時に父母に亡くなられた平山は、只獨りの肉親である妹が、卵の花の咲く頃ぼつくり死んで終つて、全ての持物を奪はれた以上に落膽した。それから彼の体からは、

現代のスポーツマンらしい、華やかさ、快活さが見られなくなり、それ等に代つて彼の陽焼けた顔には深刻な孤獨の淋しさが刻まれ、それは彼を一度に三四歳位も老けて見せた。只會社のコートで日暮まで練習して、平凡に暮してゐる彼の姿を見た時、學生時代から、今の××物産に入るのも一緒だつた西園は、何か彼の快活さを取戻し度く、その手段を考へた。そしてリオンでの陰鬱な彼の顔。

―時にね、君をね、好きだと云ふ女があるんだが。

西園は横の小路を出て來た自轉車を避けながら黙つて歩いて行く友に話しかけた。

―馬鹿な。本當にするぜ。

歩きながら平山は、微苦笑と共に答へた。

―本當だよ。おい眞面目なんだよ。今日だつて見に行つてゐたんだぜ。

眞面目さを友の顔に見て、平山は一寸本氣になつた。

―さうか。どんな人かい。

―きれいな女さ。

―きれいな丈けじや判らないよ。

―まあインテリだがね、職業婦人じやないよ。

―どんな種類の人かい。

―令嬢だ。俺は理想的な女だと思つてゐるんだ。結婚しないか。向ふだつて……、

―馬鹿な。一目も見ずに。

平山は西園に全部言はずに、強く言つて、重ねて訊いた。

君の良く知つてゐる人なのか。

うん、良く知つてゐるよ。とにかく最適な人だ君に、

馬鹿な。

今日なんかすい分喜んでゐたぜ、紹介しやうかと云たんだが、友達と一緒にんで歸つて終つたが。交際して見ないか。

まあ考へて置かうよ。

それも良いがね。

その時、道は二つに岐れてゐた。西園はアパート。平山は下宿へ。平山は立ち止つた。

じや別れよう。

あゝもうやつて來たのか、左様なら、

向ふを向いたが、一寸ふり返つて平山は眞面目に言つた。

その女の名は……

名か。姓は村本。名は敏子。君の新婚妻が早く見たいな。

變な聲色を使つて西園は平山を笑はせた。

ふざけるない。左様なら。

平山は向ふを向いて歩き始めた。大きな体が急ぎ足で人込みの中へ入つて行つた。西園は一寸止つて見てゐたが、市電の停留場へと急いだ。

人の多い、電車の中で西園は一人で朗らかになつた。彼と彼女が結婚する。式場では俺は友だちとして働いてやる。

そして彼を孤獨から救つて舊の様に戻してやる。彼と彼女の笑ふ顔がちらつく。彼女の顔。どんな顔か知ら。まあ良い今から探してやらう。西園は女の名を村本とし子と云つたことも忘れ勝ちだつた。名なんかどうでも良い。後であの名は作り名さ。本當の人はこの人だと彼に紹介すれば良い。誰か居ないか知ら。彼奴笑つたぞ。勝つても笑はなかつたのに。彼の孤獨を救はなきや、傍で見ても元氣がないからな。然し彼奴は偉い。やはり偉い、今日の試合は、素晴らしい。白いライン。ボール。室息。解放。トロフイ。優勝。結婚式。微笑。幸福。ブラボー。彼は微笑するだらう。プロジツト。活き／＼した彼の誕生。いや再生だ。「××」と呼ぶ車掌の聲に驚いて、あわてゝ電車を下りた。

實際誰か居ないかな。理想的な女性は。彼が救へる。俺までも。俺は本當に探してやらう。大きな幸福が待つてゐる様だ。雨上りの空に入道雲がむく／＼とふくれてゐた。然し如何して彼の時、村本とし子とすぐ云つたのだらう。あんな幼い時の女友達の名を。一寸分らぬ。がそんな事は如何でも良い。彼はしめつたアスファルトをふむ足に力を入れた道路の上を市電のレールが冷たく走つてゐた。

過去と云ふには余りに近い、三ヶ月もならない過去。彼は六月の末に、体の衰弱から、伯父の別荘のある此の高原へやつと來たのである。過去の經驗を土臺にした、その後の想像が彼の心の中で、停車場の風景を書き出した。それは想像と云ふには、余り鮮明だつた。

人々のがや／＼入れ交る聲は遠い國の言葉の様に響いた。市の新設コート開きの試合に出場するために、次の下り列車を待つてゐた平山は雑踏する人々を離れて、停車場の入口の大きなコンクリートの柱の下をぶらぶらしてゐた。その日も暑い日だつた。前の果物店の、埃つばい硝子の窓がぎら／＼光つてゐた。上り列車の着くのが近いと見えて、改札口へ人々が急いで直ぐ様列が出來た。それがブラットホームに出て終ふと後は幾分靜かになつた。下り列車まで後十五分余り、彼は中へ入つてベンチにかけた。見送りに來た會社のSが彼を見つけてとんで來て話しかけた。



—や、暑いね。たまらんな。

—此ちやF市も暑いだらう。うんざりするよ。

—少しはFの方が涼しいかも知れんよ。

その時—下り列車の方に改札致します—係員の聲が改札口でした。彼は立ち上つた。

—僕は急な用事があるから此で失禮させて貰ふよ。一寸急ぐんでね。

—さうか。いや有難う。

—しつかりやつて来てくれ給へ。じゃ失敬。

—いや、有難う。左様なら。

Sは忙しさうに、そゝくさと出て行つた。

ブラットホームにはもう人が出て居た。そしてあちらでもこちらでもかたまつて話をしながら、汽車を待つた。彼の立つてゐる横には、大勢の若い女達が群を作つてゐた。そして時々この群の中から、出る言葉が、彼の耳に入つて來た。

—お達者で……。

—お別れね。

—便りをどうぞ……。

—とし子さん……。

—村本さん。此れ記念品よ……。

敏子、村本。此等の言葉がもれて來た。彼は驚いた。そしてそれらの人を注視した。大勢の女に取り圍まれた、細い背の伸びた女が目に入つた。うすい藤色の着物が軽く涼しさうに見え、弱々しい顔が感情のたかぶつたために、ほのか

に、赤味を帯びてゐた。その女達の中には手巾を目にあてゐるのもゐた。別離。そんな物がすぐ平山には感じられた村本とし子。試合の歸りに西園が言つてゐた。彼女が。女達の群は彼には氣がつかなかつた。何だか知れぬ悲しみが彼をつゝんだ。その時下り列車が地を揺がして來た。そして直ぐ發車した。村本とし子、彼女は隣りの箱に乗つたらしい御氣嫌よろしく。

―御達者で……。

―左様なら。

其等の聲が、かすかに車の音響に交つた。車は種々の感情をつみ込んで走り去る。喜び。悲しみ。笑ひ。涙。希望。それ等の大きな壓力に充ちた列車内はむつと汗臭く暑かつた。

宿に落ち着く迄彼の全感覺へは村本敏子の四字にとらへられた。そしてその日の出來事の報告を、高原へ居つてゐる西園に早速知らせた。

さうする事は彼から幾分でもそのとらへられた彼の神經に余裕を恢復する事が出来る様に思へた。

彼の女が俺と一緒に市へ住んでゐたのか。十五年も昔に遊んで、未だにしばしば思ひ出される幼友達が、大きな變化が彼女の上に見舞つてゐるだらう、俺と同様に。父が死んだつて。昔から弱々しい彼女は如何してゐるだらう。野茨の咲いた夕暮が思ひ出される。緒の切れた下駄。白い脛。野茨の勾。十五年前。それでも女の顔がはつきり、網膜に畫かれる。何時でも……。不思議な程。俺は平山に何故彼の女の名を言つたのだらう。その名を平山が現在では知つてゐることが、腹立たしく自分の清い聖い殿堂をけがされた様な氣がした。自分で平山に言つておきながら。幻影が、蜃氣樓が、現實迄進んで來る時、その淡い快さが、苦しい一種の悩み――どう形容される可きかを知らない――に置換された

そして平山の事が忘れられ、とし子の事で一杯だつた。がしばらくすると、其は大きな諦めに似た感情を伴つた。彼が大きなため息をついて、そこらを物狂ほしく歩き廻りたくなつて立ち上つた時、窓の外の夕暮は室内迄侵入して來てゐた。夕暮の高原は物悲しい空氣が靜にたゞよひ、淡い旅愁に泣きたくなる程だつた。山の影が黒く巨大に見えた。そして空氣をふるはす様に牧場から笛が流れて來た。そして何處からか野茨の花の匂が訪れて來はしないかと思へた。窓のガラスが冷え、再び長く笛が尾を高原の上に漂はせた。終。

（昭和八年一月二十九日）